

幽玄

題字 高秀秀信

 横浜能楽連盟
 会報 No.45
 平成25年4月1日

能には果てあるべからず

会長 藤本 圭佑

”果て”と言えば、昨年暮れ、マヤ暦の「人類滅亡の日」(12月21日)や「太陽の異変」など、この世の終わりを予感させる報道に世界各地で騒動がありました。幸い今のところなにこともなく2012年が終わって暦が新しくなりホッとしています。

明けて今年、観阿弥生誕680年、世阿弥生誕650年です。能の大成者である世阿弥は、能楽論書「花鏡」の中で、「命には終わりあり。能には果てあるべからず」の言葉を遺しています。これは世阿弥が「能」の永遠なるを願う強い意志の表れと考えます。何故かこの時、私の脳裏に佐渡・正法寺の静かに佇む世阿弥腰掛石が浮かんできました。

あれから600余年、その道の能楽師はもとより、能の支え手は宗教・武家社会から明治維新後には政界財界へと移り、今や一般市民愛好者と言えるでしょう。その愛好者は、昭和50年代に入ると経済成長を背景に全国的に増加し、俗に

”2百万”(中森晶三「能のすめ」)とも言われ、これは実に人口1億人の2%になります。横浜の人口で単純計算すると7万人超の愛好者が存在することになります。この数をどう受け止めるかは別として、私にとって真に心強い限りです。

しかし近年、厳しい少子高齢化の波が押し寄せて愛好者数は、かなり減少しているのを見るのが大方の予想です。特に能楽を稽古する若い世代の減少が大きな課題です。若手世代の象徴として大学の能楽サークルをツイッター・アカウントにより調べたところ、サークル数は、私の予想をはるかに超えるもので、関東18(慶応 国学院 東大 早大ほか) 関西17、中部5、九州2などでした。

と大変厳しいものがあります。そこで、平成10年創立50周年を機に、従来秋に行っていた「五流能楽大会」とは別に、会員・非会員を問わず稽古を始めて日の浅い愛好者にも能楽堂の本舞台を体験していただける企画として、春の「五流交流のつどい」を創設しました。これにより若い世代が気軽に能楽を見・聞き・演じられる機会ができました。今年はさらに一歩進めて、「五流交流のつどい」の番組に若い世代の出演を取り入れました。これは、「若い世代との交流」というコンセプトにも適う最初の試みであり、前述の大学サークルの中から、つづき謡曲会が親交のある国学院大学観世会にトップバッターとして出演していただき、余寒厳しい2月16日、春風呼ぶ交流が実現しました。今後はさらに、地元の高・中・小など若い世代へと交流の輪を広げていきたいと考えています。

第61回「横浜能」は、かもん山公園が花から新緑へと季節が移り変わる6月1日(土)、金剛流豊嶋三千春師による能「熊野」と和泉流狂言三宅右近師の「酢薑」と決まりました。皆様のご協力により盛況となりますようお願い申し上げます。

二、会員数
平成24年9月1日現在の会員数は477(個人396名、企業51)で、平成23年4月1日より18減(個人17名、団体1)となりました。(会員名簿参照)

一、連盟主催の能会は次の通り
①横浜能楽堂と共催の「横浜能」は、平成24年6月2日(土)に「第60回還暦記念」として、五流の能楽師の出演により、特別企画として開催しました。前44号に会長より報告された通りです。入場券は完売の盛況でした。来場者は443名、入場率は91・2%でした。

②「第27回五流能楽大会」は、平成24年9月15日(土)に当番幹事金春流により開催されました。(別稿「大会報告」参照)

連盟報告

(平成24年度前期)

企画事業担当 青山 圭佑

す。2012年、11月1日が「古典の日」と定められ、また、世界の無形文化財に指定された「能」を皆の力で明日へそして未来へと継承しようではありませんか。

やむを得ないこととは云え、この減少傾向が続くと当連盟の運営にも支障が出てくることも予想されます。

連盟に加入していない素人同好会も相当数あります。

例えば、旭区中白根に主な稽古場がある白謡会(観世流)は、会員数80名余り、稽古場も市内に3ヶ所、新潟六日町、長崎、熊本にも支部があり、横浜能楽堂本舞台にて、年2回の発表会を素謡、連吟、独吟、仕舞20番程度、舞囃子2、3番等で開催しております。別会、研究会は年4回ほど、日本各所の能舞台や、地方の名旅館等で開催、また、川崎能楽謡曲連盟(観世流)では年4回の川崎能楽堂にての定例会に、会員を2班に分けて交互に出演しております。2ヶ月毎に上白根の稽古場にて研修の為、素謡会を行っております。別会研究会は、大山阿武利神社能舞台、奈良県立公会堂の能舞台、観阿弥が創座の地といわれる三重名張市のふるさと公園内能舞台、フランス、プロヴァンスの能舞台、イギリス、ロンドン大学などでも披露しております。

現状の連盟運営方式での枠内で加入が勧誘できるか検討する必要があると考えます。

第28回「五流能楽大会」を終えて

金春流 水野 次郎

横浜五流の大会を準備する担当の大役、新年を迎えた段階では正直云って自信が持てなかった。しかし会の仲間は勿論のこと都築の会皆様の協力が得られた事で勇気づけられ、さらに本部役員でもある金剛流の倉藤理事さんの懇切な助言を得られたことは感謝のしようが無い、改めてお礼申し上げます。

準備に当たっては、丁度この時期にロンドンでオリンピックが開かれるので、早めに企画し、確実に各流派責任者に連絡し期限内に正確な返事を戴くことに気を配り、能楽連盟の理事会と大会共催をしていただけた能楽堂事務局との連絡も遺漏なきよう特に心配りをしました。

その結果、2月27日の理事会で大会の「概要案」を説明、ご理解を得られたので3月10日に各流派責任者各位に「出演申込書・他」を送ることになりました。そのあとは申込み締切日の4月末日を待たぬ内に申込みの返事が揃い、5月の半ばには「番組素案」が完成、6月7日の理事会に諮ることができました。その後は「下刷り」「校正」と進み、目標の8月15日までには製本された「番組」を出演の皆様のお手元に届けることが出来ました。お盆休みをやり繰りして作業を進めて頂いた大洋印刷工業(株)の関係者に感謝いたします。

いよいよ大会を1ヶ月後に控えた段階で、各流派責任者の各位のお力添えを戴きながら「駐車」「高見台」「弁当」の希望の有無、数の調査を兼ねて大会当日の進行の理解と運営への協力をお願いしました。殊に今回は「控え室」での従来の茶菓の提供の在り方を替えたことへの事前のご理解と周知方のお願いを最後に、当日を迎えることになりました。

さて迎えた当日は、予定通り9時半の開演、今大会の競演曲目、「仕舞・紅葉狩」6番をはじめ、合わせて34番、総計281名ご出演で午後4時41分閉演、予定より少し早めに閉会となりました。

尚、当日の進行・運営に当たりましては私ども春巳会だけでは手不足でしたので、同じ金春流の「高砂やを謡おう会・都築」の皆様のご協力を戴けたこと、そして控え室での「茶菓」接待の変更で女性陣の負担をなくす事にご理解が得られた結果、無事にお役目を果たすことが出来ました。ここに重ねて感謝申し上げます。

久良岐能舞台二十五周年を迎えて

久良岐能舞台館長 黒岩 忠臣

久良岐能舞台は開館二十五周年を迎えました。横浜市民の能楽施設として皆様に支えられ、この日を迎えられましたことを、施設運営に携わる職員一同、心

から感謝申し上げます。能楽愛好者の皆様が日々切磋琢磨し、時には壁にぶつかりながら成長して行く、その過程を目の当たりにしている私どもは、この施設に課せられた役割を何とか果たせていると思っています。

久良岐能舞台に保管されている開館当初の写真や記録の数々を見て、私は施設の開館に寄せられた市民の期待の大きさと、能楽愛好者の皆さんの熱い想いを感じています。

私ども、株式会社シグマコミユニケーションズは、7年前の平成18年、横浜市の指定管理者として久良岐能舞台の管理運営に選任され、以来7年を経過しました。この間、久良岐能舞台を知らない市民や、能楽に数居の高さを感じておられる方々に、一度足を運んで頂こうと、分かり易いワークショップや狂言会、地域と協同しての久良岐まつりなどの様々な催しを開催し、随分多くの市民にご来館頂くようになりました。また毎年、近隣の小学校6年生を学校単位で招いて狂言鑑賞教室を開催するなど、教育面からも能楽の普及振興に努めてきました。しかし

久良岐能舞台を利用して研鑽を積まれる能楽愛好団体の数は年々減り続けています。私どもは、こうした現状に非常に危機感を持っており、ただ腕をこまねいて見ているだけでは解決できません。そこで一昨年から、開館当初から行われていた教室を、久良岐能舞

台能楽講座として再開、通年開催するようにしました。25年度は喜多流、金春流、宝生流で謡と仕舞を、また囃子講座も併せて開催し、笛、小鼓、大鼓、太鼓それぞれで講座を開催しております。いずれも年間通しての講座ですが、多くの受講生が熱心に取り組んでいます。私どものこのような方策が少しでも能楽愛好者の増加に役立ち、或いは愛好者の減少の歯止めになることを祈っています。今年1月27日、久良岐能舞台では開館二十五周年記念能を開催、狂言「因幡堂」及び能「清経」をシテ観世銑之丞師により上演しました。幸い良い天気にも恵まれ、来場者の半分以上は初めて能を観るという方々で盛況でしたことをご報告申し上げます。

今後、横浜で能楽を愛好されておられる先輩諸兄の御指導を賜りますようお願い申し上げます。

能に登場する人々

観世流 長谷川武雄

能には様々な人物が登場する。その社会的地位を見ても上は天皇から下は下賤の民まで、男性も女性も、年齢も老人から子供まで、職業も様々な人々が登場する。

私が能に魅かれる理由の一つは、登場人物がいずれも立派な人柄であり、その言動に誤りがなく魅力的な点にある。

多くの人に知られている曲を

例にとろう。「隅田川」である。この曲のシテは狂女、ワキは渡守である。

シテの狂女は京の北白川に住んでいた吉田の某の妻で、人に拐わかされて行方知れずとなつた我子を捜し求めて、京から遙々武蔵の国隅田川まで下つて来る。狂女は隅田川の渡守に対して、私も舟に乗せて欲しいと頼む。渡守は狂女が美しく狂い舞えることを聞き知っていたので、狂い舞を見せてくれれば舟に乗せようとする。狂女は渡守のこの言葉を聞き咎め、名にし負う隅田川の渡守ならば、日も暮れようとしているのであるから舟に乗りなさいと言うべきではないかと抗議する。狂女は更に渡守にあそこ白い鳥が飛んでいるが何という鳥かと尋ねる。渡守があれば沖の鴉であると答えると、狂女は隅田川の渡守ともあろう人が、何故白い鳥のことを都鳥とは答えないのかと詰問する。すると渡守は狂女の抗議を素直に認め「これは間違つた答をしました、名所には住んでいるが風雅な心がなくて都鳥とは答えられなかった」と詫びるのである。

この言葉の遣り取りを聞けば、現代人には不審に思えるのではないだろうか。隅田川には当時橋は無く、渡舟に乗せて貰わなければ下総には行けない。渡守は、自分の言い分を聞かないのであれば舟に乗せないことができるのである。渡守はこの場面において、狂女に対して圧倒的

に強い立場にある。他方、狂女は伴人も伴わず一人で旅をしていることでもあり、高貴な人でも財力を持ち合わせている訳でもないと思われる。狂女にあるのは教養と品格である。狂女は在原業平の「名にし負わばいざ言問わん都鳥、我が思ふ人はいややなしや」という和歌を基にして、渡守の世俗的で通り一遍の対応に物言いを付けたのである。これに対して、絶対的な強者である渡守は、狂女の言葉の裏にある教養と、子を捜し求める愛情に裏付けられた凛とした態度に心を動かされ、素直に己が対応の心無さを認めるのである。

このように、能に登場する人々は物事を弁へ、一旦過ちを犯しても素直にこれを正し、物語を美しく彩ってゆく。

能を愛好する人々は、こうした登場人物の見識と心に残る遣り取りを楽しんでいるのだと思う。私が能を愛する理由の一つがここにある。

私の財産

宝生流 嶋内 麗子

わが家の本棚の片隅に、色褪せた表紙、水に浸ったシミ、錆びたホチキスで止めてあるという、やつと原型をとどめている宝生流謡本があります。大正10年から15年発行で、昭和初期に主人の父がお稽古した時のものです。戦災や度々の引越しの度に冊数も減り、僅か10冊足らず

になりましたが…。

その謡本があったからという訳でもないのでしょうか、昭和30年代半ば、主人は職場の同好の方5、6名で地元の先生について宝生流謡曲を習い始めました。しかしその後数年の間に次々とやめていき「自分一人になった」と言っていました。2か月に一度くらい地方に出稽古に来て下さるプロの先生の声に魅了されて、続けていたのかも知れません。

時は流れて現在地に居を構えた昭和51年には、教授嘱託のお免状を戴き、数名のお弟子さんと賑やかに楽しく時を過ごしていました。私も「一緒にやれ」と言われましたが、家事の合間に唯々適当に謡っているという不真面目な弟子でした。

やがて主人は定年を迎え、数年後久良岐能舞台に勤めることになりましたが、僅か3年余りで急逝しました。私もしばらくは残された謡本や舞扇を見ることも、手にすることも出来ずになりましたが、一周忌を過ぎた頃、供養になるのではないかと思うようになり、平成4年4月から宝生流職分前田親子先生の茅ヶ崎のお宅にお稽古に伺わせていただくことになりました。

その年の夏の初め頃先生から「舞囃子をやりませんか」と言われ、お受けしてみたいもの、当時64才、覚えるのも大変でした。唱歌を先生の後について続け、その年の11月には川崎能楽堂で生まれて初めて、「胡蝶」

中之舞を舞わせていただきました。その後2年おきくらいに「序之舞」「早舞」「楽」「神舞」「神楽」と続け、平成22年の「誓願寺」序之舞の時には82才になつていました。



年齢を重ねると共に足腰が弱くなり、だんだんと仕舞さえ覚えなくなってきましたが、良い師に恵まれ、宝円会会員や流友の方々と幸せな時を過ごさせていただいています。また、主人の一番弟子であった小林美佐子さんが、横浜能楽連盟で活躍されていることを思うと、心強くもあり嬉しくも思っております。今年1月には23回忌法要を済ませた主人が、目に見えない諸々の財産を残してくれたことに感謝し、改めて「ありがとう」と心の中でつぶやいている今日此の頃です。

初心忘るべからず

観世流梅若会 友田 貞子

私が謡と仕舞に出会ったのは、平成9年のある日、市の公報で生徒募集を知った時でした。

上大岡駅から、右に左に曲って、登ってと電話で教えていただいたメモを片手に、胸を踊らせて、久良岐能舞台におじゃました日を思い出し、まず。初めて見る能舞台の立派さに身が引き締まる思いでした。緑豊かな庭園から吹き抜ける風もさわやかに稽古が始まったのでした。

和服をきりりと召された先生の豊かなつややかなお声と旋律に聞きほれ、穏やかな滑らかな、流れるような足運びに酔いました。

今まで洋の音楽に親しみ、コーラスなどを楽しんでいたのですが、それは私にとって「動」の世界でした。外へ向うものだった様に思います。今度「静」の世界を学びたいと思いました。

あれからの日々私共に沢山の楽しみと経験を与えて下さった高橋則子先生が昨年亡くなられましたが、私共宏声会の10人は今後共この心の一つに精進して参ります

かねさわ

喜多流 後藤 政也

金沢区は三浦氏の時代から、850年の歴史があり、唐よりの交易は六浦津(むつらのつ)、中世では鎌倉の外港として幅広い国際色豊かな文化が伝来し、金沢と鎌倉は一体で栄えたのでした。只今は武家の古都鎌倉の世界遺産登録では、金沢区の朝夷奈(あさひな)の切通と称名寺が推進されています。

お能では、ご存知鎌倉の中納言冷泉為相卿が詠じた青葉の楓の「六浦」が称名寺で作られています。切通では朝比奈三郎義秀の狂言「朝比奈」が作られており、更には鎌倉に幕府を開いた頼朝が伊豆三嶋明神の分霊を遷祀した瀬戸三嶋大明神の現瀬戸神社では境内で牧野左衛門の遺児小次郎兄弟が親の仇である刀根信俊を討った「放下僧」が作られており、その謡曲の小唄は狂言の「寝音曲」でも知られています。

金沢は古くはカネサワと呼ばれていました。金沢文庫の古書に倉城(久良岐)郡六浦庄内金沢村とあり、当時はカネザワをカネサワと呼んでおり、この地方に鍛冶匠が多く住んでいたのだろ、カネサワと呼ばれたのだらうとしています。

称名寺は鎌倉時代北条実時により開基された真言律宗の寺院で、実時は時の若き執権時宗を補佐して蒙古襲来に対する作戦の指揮を執りました。金沢文庫創設者であり、幕府の要職歴任の中、早くから政治ばかりでなく学問に関心を持って儒家清原教隆に師事し和漢の書を始め広



範圍に亘って学び、その書物は
顕時、貞顕、貞将と引き継がれ、
その蔵書は北条一門や学僧に利
用されました。多くの人が全
国から金沢文庫を訪れ、徒然草
の兼好もその一人と言われてい
ます。

また、金沢には史跡も中世の
上行寺やぐら群や鼻欠地蔵、
白山道の磨崖仏と数多くありま
す。近世では金沢藩は六浦藩とも
呼ばれ、陣屋を六浦に構えていま
した。金沢は八景を始め風光明媚
な景勝の地で、明治の元勲伊藤
博文や三条実美、松方正義、大
鳥圭介らの別荘があり、その後、
日本画家川合玉堂の二松庵(現在
も富岡の里山にある)や鏑木清方
の(遊心庵)もありました。

さて私は新住民としてこの地
にお世話になり早くも40余年が住
み去っています。実時のこの国の
学芸振興を図った志を追慕し、ま

た横浜の吉田新田と同様、金沢の
泥亀新田亀巢翁永島家九代に亘
る辛苦の開発づくりに思いを
馳せながら、伝統文化の一つで
あるお能について興味を持ち、
山崎有一郎先生が推薦する喜多流
の出雲師に入門し、不肖な弟子
ですが10余年に及んでいます。

只今金沢では毎年5月に称名
寺で薪能が定着して、お能の教
室も行われており、伝統文化や
地域文化の普及継承が進んでい
ます。金沢は歴史と文化が薫る
街です。金沢へお出かけ下され
ば幸いです。

謡曲「玉葛」と源氏物語

金剛流 豊増 清明

謡曲「玉葛」のシテは、源氏
物語のヒロインの一人、玉葛で
ある。玉葛は頭の中将与夕顔の
娘で、出生後、数奇な運命を辿
る。後に光源氏の保護を受け、
その美貌と才知ゆえに源氏は勿
論、冷泉帝を初めとする公達に懸
想される。その挙句、思いもかけ
ず髭黒の大将の妻となるも、二男
二女を儲ける。玉葛は源氏物語
では、第二十二帖「玉葛」から、
第三十一帖「真木柱」のいわゆ
る「玉葛十帖」などに登場する
シンデレラ的な人物である。

しかし、能では、主として四
番目の(狂女もの)として取り
扱われている。通常、若く美
しい女性が主人公の曲は、三番
目の(髷もの)として扱われ
るのに、何故狂女ものなのか。
私は、この疑問を解くために、

源氏物語の主に玉葛に関連する
部分を原文で読んだ。どの帖で
も、玉葛の美しさ、感性の鋭さ、
聡明さ、慎みの深さ、そして、
運命に対していつも前向きな生
き方を知ることになった。

能「玉葛」の作者は、世阿弥の
女婿、金春禅竹である。歌道、仏
教に造詣が深く、哲理的で「定
家」などの能作があるが、主題
や焦点がはっきりしないものが
多いとも言われている。

謡曲では「玉葛は死後もなお
恋の妄執に苦しみ、長き闇路を
迷う身を嘆く。そして生前の恋
愛遍歴を懺悔し、妄執を晴らし、
心は真如の玉葛、永き夢路は
覚めにけり」と成仏する」とな
っている。しかし、謡曲の主題
である。「恋の妄執と成仏」を
源氏物語本文から直接読み取る
ことはできなかった。

紫式部は玉葛十帖の中で、妄
執とか懺悔、成仏などの言葉は
一切使っていない。では、玉葛
の「恋の妄執と成仏」を禅竹は
どのように見たのだろうか。玉
葛の妄執とは、玉葛自身の存在
と運命によることは勿論である
が、源氏の玉葛への接し方にあ
ったのではないか。

玉葛は源氏に養父として世話
を受けた三年間、源氏の監視下、
源氏の企み通りに、若い公達と
の恋のやりとりをする。しかし、
玉葛本人が恣意的に恋を仕掛け
た訳ではない。公達の求愛にも
まともに応えていない。玉葛は
源氏の養父としての倒錯した求
愛に、当初は戸惑い嫌悪するが、

次第に源氏の魅力の虜になって
行く。そして、髭黒の妻となつた
後も、源氏の優しさを惜しむ。

禅竹は、この辺りの微妙な女
心の揺れを妄執と見たのか。し
かし、その原因は、やはり源氏
の心の迷いに他ならないと私は
思う。「妄執と懺悔」は、玉葛
への愛執に苦しみつつも自制し
た源氏の心の迷いそのものであ
ったのではないだろうか。

能楽堂だより

二十五年度、五〇八月の横浜
能楽堂の公演予定は、次の通り
です。このほか毎月第2日曜
日に「横浜能楽堂普及公演」横浜
狂言堂」を開催いたします。

第六十一回横浜能

六月一日(土) 午後二時開演
狂言「酢薑」(和泉流) 三宅右近
能「熊野」(金剛流) 豊嶋三千春
チケット発売日
三月九日(土) 正午から
(初日は電話・webのみ)
S席四千元、A席三千五百円、
B席三千元

普及公演

「夏休み親子能楽ワンダーランド」
八月三日(土) 午後二時開演
狂言「柿山伏」(大蔵流) 山本則重
能「土蜘蛛」(観世流) 武田文志
チケット発売日
五月十一日(土) 正午から
(初日は電話・webのみ)
おとな/S席四千元、

A席三千五百円、B席三千元
こども/千五百円

保護者はこどもと同数まで千円
引(ご希望の方は電話か窓口にて
お申込み下さい)

※お子様のお席をお求めになら
ない場合は適用されません。こ
どもは十八歳以下が対象です。

「体験しよう!」午前十時半か
ら・チケット(こども)ご購入
の方対象

能・狂言の動きや能の楽器が体
験できます。

定員・八十名(電話か窓口にて
お申込下さい。先着順)※親子
でご来場ください。

《編集後記》

△久良岐能舞台開館25周年おめ
でとうございます。久良岐能
舞台を市民の方々に知ってい
ただくために、分り易いワ
ークショップや久良岐まつり
の開催、近隣区の小学6年生
を招いて狂言鑑賞など、能楽
普及に力を注がれているのに
感心致しました。

△第16回「五流交流のつどい」
で今回から新企画として近隣
の大学の能楽サークルの方々
を招待して発表して頂くこと
になり、第1回目は国学院大
学観世流の学生による仕舞3
番が披露されました。若い人
の出演は会場に花が咲いたよ
うな華やかでした。第46号の
報告記事には仕舞の写真も掲
載したいと思います。